

さて今年のセ・リーグ覇者は？

統計分析を試みてみました

毎週水曜日は小田原に出かけてラジオ体操に加わり、その後「ガスト」で朝食会をしてからテニス練習会に向かうのですが今週(4/13)は予定が変わっていたため 3 時間ほどヒマな時間ができてしまったので「ガスト」にとどまって、スポーツ新聞から得た 4/12 現在のデータ(下表)を用いて手計算による相関分析を試みてみました。

チーム順位	打率	本塁打	得点	失点	防御率	犠打飛	失策
1. 巨人	.258(2位)	20(1位)	71(2位)	63(5位)	3.25(3位)	11(4位)	7(4位)
2. 広島	.259(1位)	4(6位)	74(1位)	41(1位)	2.40(1位)	31(1位)	1(1位)
3. 中日	.243(3位)	12(3位)	49(4位)	45(2位)	3.28(4位)	7(5位)	9(5位)
4. ヤクルト	.228(5位)	17(2位)	56(3位)	56(4位)	3.03(2位)	4(6位)	4(2位)
5. DeNA	.239(4位)	7(5位)	44(5位)	53(3位)	4.32(5位)	14(3位)	13(6位)
6. 阪神	.228(5位)	10(4位)	39(6位)	75(6位)	4.69(6位)	16(2位)	4(2位)

「得点」と「打率」が2位の巨人がチーム順位首位

簡易順位相関分析によると、チーム順位と相関係数が最も高いのは「得点」で、その要因となる「打率」が続いています。巨人がチーム順位1位に立てているのは「得点」と「打率」がともに僅差の2位だというのが影響しているように思えます。打撃10傑にも吉川尚輝(3位)と坂本勇人(8位)の二人の巨人“子飼いの選手”が顔を並べているのは、私のように他球団からの“買入れ選手”ばかりが多いのでアンチ巨人に転じてしまった者にとっても嬉しく感じられるところです。しかし、巨人で目立つのは「本塁打」が断然首位を占めているところで、さすが本塁打フェチのナベツネ元オーナーが本塁打者を寄せ集め続けてきただけのことはあるわいと思います。本塁打数ランキングでも、丸佳浩(4本で1位)、ポランコ(3本で5位)の“買入れ選手”が名を連ねていますが、“子飼いの選手”の岡本和真が丸佳浩と並ぶ4本で1位に並んでいるところがせめて救いとなっています。

「守りの野球」は今や広島の旗印

2019年に丸佳浩が巨人入りし、そして今年鈴木誠也がMLBカブスに去った広島は攻撃力の面が辛いだらうなと心配していたのですが、案の定「本塁打」は断然のビリ。それでも「得点」で首位を占めているのは「打率」が1位で、打撃10傑にも坂倉将吾(3位)、上本崇司(6位)と西川龍馬(7位)の3人が名を連ねています。また、「犠打飛」が断然トップなのも「得点」の首位を支えているのかもしれませんが。それよりも更に、「防御率」が首位で、「失策」が最も少なく「失点」を最小にとどめている姿が目立ちます。川上哲治監督を牧野茂ヘッドコーチが支えていたV9の時代の巨人が掲げていた「守りの野球」は今や広島の旗印になっているようです。巨人は「防御率」が3位で、投手成績10傑に一人も入っておらず、戸郷翔征と菅野智之がそれぞれ12位と13位にランクされているだけです。「失点」が5位と低位なのも4位に低迷している「失策」の多さと無関係ではありそうもありません。

私の一押しは高橋奎二投手（ヤクルト）

いずれの項目もランキングが低い DeNA にはみるところがなく、補強点がどこにあったのか定かではありませんが、「失点」2 位の中日と「防御率」2 位のヤクルトが今後どこまで順位を上げてくるのか楽しみです。投手成績 10 傑 8 位の大野雄大と 9 位の柳裕也の中日コンビは既成戦力になっていましたが、ヤクルトの高橋奎二は 2 位で今シーズン急伸長の新戦力。4/10 に 120 球の熱投でプロ 7 年目で巨人戦初勝利を挙げたのをテレビ観戦しましたがなかなかの傑物だとお見受けしました。この人の活躍が起動力となって「守りの野球」を強化できるかどうかはヤクルトの 2 連覇の鍵ではないかと思っています。爽やかな印象のする好青年ですが、奥方は元 AKB48 で歌手の板野友美さんなのだとか。「板野友美と高橋奎二の年収比較」なんてインターネットでいじられていましたよ。しかし今年は年収も相当アップしますよ。俄か批評家の私の一押し選手です。今後の活躍ぶりにご注目ください。